
降雷の魔術師

刹那END

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

降雷の魔術師

【Nコード】

N2993Y

【作者名】

刹那END

【あらすじ】

高校一年生——斉藤敬治は尊敬していた先輩である谷崎が犯罪者となった経緯を追求するべく、彼が通っていた高校の魔術部に入ることを決意した。しかし、その魔術部には“人類にとって重要なもの”が存在し……——

?. Prologue

さいとう けいじ
齊藤敬治が中学生の時、彼の祖父は他界し、祖父の家の整理を余儀なくされた。

整理している最中に敬治はある書物を見つける事となった。

『「魔術」……?』

そう言えば、うちの学校にも魔術部ってあったな……

その題名を読み上げた敬治は、家に帰って興味本位にその書物を読んだ。しかし、その書物を読んだ事により、敬治は違う世界へと足を突っ込む事となってしまうのだった。

中学一年の夏。敬治は魔術部を見学し、部長に押され、入部する事となった。

『敬治。魔術は好きか……?』

『人を楽しませるような魔術は好きです……けど、人を傷つけるような魔術は嫌いです』

敬治へと質問をした魔術部OBの男はその答えを聞いて微笑む。

『だから、自分が使う魔術が嫌いなのか?』

『……はい』

OBの男は溜息を吐いて、部室の窓から外を眺めた。

『でも、魔術って使い様によっては人を傷つけられるけど、助ける事も可能なんじゃないのかな? そう考えると、後の方の目的で、敬治は自分の魔術を使えば、いいんじゃないか?』

その言葉を聞いて敬治は自らの魔術を人の役に立つような事で使う事を決めた。

そして、敬治が中学三年生になった夏。彼に衝撃が襲った。

——魔術委員会会長の暗殺未遂事件。

しかし、彼が衝撃を受けたところはそこではなかった。

『な、なんで……？　なんで！？　“谷崎先輩”が！？』

その名は敬治が慕っていた魔術部OBの人間の名前だった。そして、谷崎は『魔術委員会会長の暗殺未遂事件』の首謀者であり、逃亡していた。

俺が中一だった頃の後から……一体、谷崎先輩に何があったんだ……！？

信じられないと目を大きく見開き、谷崎に何があったのかを調べる為に敬治は彼の通っていた東坂高校に進学する事を決めた……――

――夢……かあ……

悪い夢を見たような気分の敬治はその夢の内容を思い出せないまま、自らの体をベッドの上から起こして、棚に綺麗に並んだコミックスを眺めた。

発売日は来週だっけ……？

うろ覚えな事柄を頭の中で反復させながら、ベッドから起き上がった敬治は身体を伸ばし、視線を外へと向けた。

……今日は魔術部に見学しに行こう……

敬治は無事、東坂高校の新生になっっていた。

?. 魔術部見学

——“魔術”——

——それは一時期、世間の注目を浴びたものであった。

しかし、魔術は自分の頭の中で理解していないと、使えないものであったのだ。例えば、火の魔術を使うとなると、空気中のどのくらいの量の酸素を消費するのか、その酸素の消費量でどの程度の熱量を発するのか、などを頭の中で理解していなければ、魔術は使う事ができない。

つまりは、扱いが容易ではない。

そして日本は、魔術が世間の注目を浴びた際に、抑制の為、魔術に関する法律を制定した。

その法により、科学の威厳が保たれ、魔術は扱いの難しさと、法律の制定から衰退していった——

「———と言うわけで！ この魔術部は、将来、何の役に立つ事もない事を研究する部活なのである！」

銀色の縁の眼鏡をかけ、細い眼と細い顔の形をし、身長一七八センチくらいの東坂高校の魔術部部长——藤井亮は、そう言いながら、両手を脇腹に置いて、仰け反り返る様な姿勢をとる。

そんな部長を前にして、ポカンとした表情を浮かべているのは、魔術部に見学しに来た齊藤敬治であった。

な……何なんだ……！？ この人たちは！？

眼が丸く、身長一七二センチくらいの頭からアンテナを一本伸ばしている敬治は自らが今、置かれている状況に困惑する。

敬治は魔術部の部室に入った途端、部室にいた部長である藤井の掛け声と共にその部室にいたもう一人の人物によって、縄で拘束された拳句に、部長の言葉はそんな敬治にお構いなく、始められたのだった。

「こ……これは……！？　　どう言う事なんですか……？」

「部長。見学しに来てくれた新入生が、ガチでひいてますよ。それに他の部活も大して、将来に何の役にも立たないですよ」

未だ、その身体を堂々と仰け反らせている部長に対して、その横にいた人物――江藤清二は溜息を吐いてみせた。

丸い顔立ちに穏やかな目つきの江藤は身長一七三センチくらいで、魔術部の副部長を務めおり、先程、部長の指示に従って、敬治を拘束した人物であった。

「と言うか、魔術の説明よりもまずは、自らの“腐った名前”を言うのが先だと思えますけど？　部長」

「腐った！？　今、絶対『腐った名前』って言ったよねっ！？　ていうか、部長って呼んで、敬語使ってるけど、清二君は全然、俺の事敬う気なんてさらさら無いよね……？」

声のトーンを段々と落として、恐る恐る尋ねた部長に対して、副部長は吹き出した。

「えっ？　今頃？」

と小声で呟いた副部長であったが、真横にいるため、部長には丸聞こえ。床に膝を着いて、四つん這いに項垂れる部長を他所に副部長は目の前の敬治に対して、話を進めていく。

「今日は見学しに来てくれてありがとう。じゃあ、まずはこっちから自己紹介していきますね。この床に項垂れてる人が魔術部の“一応”部長の藤井さん。三年生はこの人しかいないから、二年生である僕、江藤清二が副部長を勤めてます。あと、部員は他に四人いるけど……今日はサボり……みたいです」

「サボりって……？」

「ああ。気にしないでいいよ。この魔術部ではザラだから大丈夫です」

「いや、ザラって……この部活、ホントにちゃんと、成り立ってるんですか……？」

江藤を少し睨みつけながら疑問に思った事を口にする敬治は魔術部に入らない方向へと、心は揺らぎ始め、それが行動となって現れようとしたのだが、足も手も椅子に拘束されていたため、それが叶う事はなかった。

そんな動いた足に掴みかかった部長は笑いながら、四つん這いの状態で敬治を見た。

「ハハハッ！ 計六人の部活の四人がサボり……崩壊寸前のこの部にこのことやってきた獲物を……簡単に取り逃がしたりはしないさっ！」

「よ、四人もサボってるんですか！？」

崩壊寸前……くそ！ 谷崎先輩の情報を得るためとは言え……入る気になれない……！

悔しい表情を浮かべる敬治に対して、部長は企み笑いを浮かべ、

江藤は微笑んでみせる。

「まあ、そう言う事で。君の名前は？」

江藤のその質問と共に立ち上がる部長。二人を眺めながら、敬治は自らの名前を告げる。

「斉藤敬治です……」

「斉藤敬治君ね。今日は無理やり拘束しちゃったのを謝らせてもらうよ。すまなかった。敬治君は魔術は初心者？」

「いえ。魔術は使えます」

と淡々と答えた敬治に対して、二人はその目を大きく見開き、光らせ、喜んだ。

「ホント！？ 経験者は大歓迎だよ！ けど、今日は体育館使えないしなあ……そして、特にやる事もない……」

やる事ないって、ホントに崩壊寸前だな……魔術部……
儚く消えていくものに哀れみの眼を向ける敬治。

「明日！ 明日また、この部室に来てくれるかい？」

部長のその尋ね掛けに対して、敬治は頷いてみせた。

行く気は無いけど……頷かなかったら縄外して貰えないしな……

「やった！ じゃあ、明日！ また、ここで！」

と言って、『部長の席』と書かれた紙が張られている椅子に座る部長と何かの作業をし始める江藤。

それを数秒眺めた敬治は痺れを切らして、言葉を放った。

「この縄を……早く、外してください！！」

「あっ？ ごめん、忘れてた」

と言って、縄を解きに敬治の元へと近寄った部長は縄を解くのにかなり苦戦しているようであった。

「あの……早くしてもらえませんか？」

「いや！ 早くしてるんだって！ でも解け難いんだよ！！」

逆ギレ……キレたいのはこっちなんですけど……？

段々と不満が溜まっていく中、江藤がはさみを取り出して、部長を退かせ、縄を切った。

「あるなら早く使ってください！？」

「いや、二人が段々とイライラした表情になってくのが面白くなって……つい、ね」

「そんな『つい』はありません！ 帰ります！」

足音を「どすどす」と立てながら、敬治は魔術部部室を後にした。



次の日

魔術部……

放課後の賑わう廊下を歩いている新入生——斉藤敬治は溜息を吐

いてみせた。

何でこんなに足が重いのか……って分かるきってるんだけど……

高校でも魔術部に入ろうか、入るまいか悩んでいた敬治の頭に昨日の出来事が思い出される。入った途端に拘束された拳句に一方的に説明され、部に入るように強要され、終いには逆ギレしまされたその出来事。そして、六人中サボりが四人の崩壊寸前の魔術部。

問題だらけの部に入りたくなくても、情報を得たい……入らないと！

拳を強く握り締めながら、魔術部の部室の前に来た敬治はその扉を四回ノックした。しかし、応答はない。

まさか……誰もいない……？

ゆっくりと魔術部部室の扉を開けて、中を窺った敬治の眼には一人いない部室の光景が広がっていた。

全員サボり……って事はないよね……？

顔を引きつらせる敬治は本棚に置かれたある物に目が入った。

部室にコミックスなんて置いてもいいのか……

本棚に近寄った敬治はそこに置かれたコミックスを見ながら苦笑い。そして、その横にあった物に視線を奪われた。

「何これ……？ ルービックキューブ？」

そう言っ、敬治が視線を奪われた先には、ガラスボックスに入れたルービックキューブのように二十六個の正方形が固まって一つの正方形を作っているキューブがあった。しかし、普通のルービックキューブと異なるのはその“色”であった。

敬治の目の前のルービックキューブは全ての面が金色に輝いていたのだった。

綺麗だ……

そう見とれていた敬治の横にいつの間にか一人の人物の姿があり、不審そうに彼の事をじっと見つめて、立っていた。

「君……誰……？」

横から唐突に聞こえてきたその声に振り向いた敬治の目に映る女

子生徒。敬治はその人物が、自分が気付かないうちに、この部室にいる事に驚きすぎて、部室の床に尻餅を着いて倒れた。

い、いつの間にこの人は……！？ この部屋に入ってきた！？

「いや、びっくりするのはこっちなんだけど……部室に入ったら、見知らぬ男子生徒が“部長のキューブ”見つめててさあ……」

敬治を驚かせた女子生徒は肩よりも少し伸びた髪の手先である頭を掻いて、困った様子を見せる。顔の形はスツとしていて、眼は細くもないし、大きくもない。可愛いと言うよりは、綺麗と言う言葉の方が似合う、そんな女子生徒である彼女は身長一六一センチと女性にしては高い方だ。

部長のキューブ……？ いや、それよりも誤解を解かないと……

「えっ……と、俺はその……昨日、部を見学に来て、今日、部室に來いって言われたから……部室に來ただけで……」

「ああ！ そう言う事！ 部活入ろうとしてんのね。私は昨日いなかったけど、この魔術部に入ってる二年の神津沙智ウツキ。入るんなら、よろしく」

そう言って、神津によってのばされる右手を手にとって、敬治は立ち上がる。

「ありがとうございます。と宜しく願います……俺は、斉藤敬治って言います……あの、『部長のキューブ』ってどういう事ですか……？」

「部長は変なものを集めてくるのが趣味なの。だから、時々、あんな物をどこからか持ってきては、部室に飾ったりするのよ」

「そうなんですか」

敬治は納得した表情を神津に見せた。

すると、その瞬間、部室の扉が勢いよく開かれ、一人の人物が部室に顔を見せた。

「敬治君！ お待たせしてしまって、すまないね！ っと沙智ちゃんとは昨日、来なかった分をちゃんと、仕事で返してもらおうから！」

銀縁の眼鏡をかけた部長は、部室に入ってきて来て早々、大きな声を

張り上げ、敬治の手を掴んだ。

「さて！今日は君の魔術の実力を見せてもらおうとしようか！」

そう言って、敬治の手を引いたまま、部室を後にしようとする部長だったが、敬治はその場を動こうとはせず、部長も止まる破目になった。

「なんだよー……出鼻を挫^{くじ}かないでくれよ」

「すみません。ちょっと、質問したい事があるんですけど……」

敬治の言葉に耳を傾けようとする部長の様子を見て、敬治は質問を紡ぎ出す。

「この部活って……毎日、何やってるんですか？ 中学の時の魔術部では、魔術の勉強とかしかなかったんですけど？」

「中学の時、魔術部入ってたんだ！へえー……でも、この高校の魔術部は勉強がメインではないね……僕らは毎日――」

「――遊んでる」

「えっ!？」

部長の言葉を遮って、続きを述べた神津の言葉に対して、敬治は声を漏らし、部長は睨みつけた。

「『遊んでる』とは失礼な！」

「いや、遊んでるでしょ……だから、皆、サボるんだよ。斉藤君も今日、やる事を見てたら何となく、分かるよ」

遊んでる……こんな部活が谷崎先輩に影響を……？

呆れた顔でそう言った神津の言葉を聞きながら、敬治は表面では苦笑いを浮かべた。

「じゃあ、体育館に行こうか！」

部長のその声に呼応して、三人は部室を後にしていった。

？. 籠球で魔術？

体育館

「ダムダム」というボールを床につく音が鳴り響くのと同時に、体育館のワックスの塗られた床に靴が接して、「キュッキュッ」と音を発した。その後、どちらの音も止まり、手からボールが放たれる音が鳴り響く。次の瞬間に紐にボールの触れる「シュッ」という音が体育館全体を包み込んだ。

そう。これらの音は、バスケットボールを床につく―ドリブルしながら走り、スリーポイントラインの中に入った瞬間にジャンプシュートを放ち、ゴールに入るまでの一連の動作から齎もたらされる音であつた。

目を瞑って聞いていれば、バスケ部が練習をしている風景を思い浮かべる音であつたが、それを実際に行っていたのは“魔術部”の副部長である江藤だつた。

そんな体育館に三人は足を踏み入れる。それと同時に江藤は入り口にいる三人の方へと振り向いた。

「おっ！ 部長！ 早くしないと、バスケ部が部長をリンチするそうですよ！？」

Tシャツに膝までの半ズボンという完全に練習着姿の副部長がボールを両手に抱えて、部長に向けて叫んだ。

「はいはい、分かつてるってー！」

と自らの鞆の中から江藤と同様の練習着を取り出す部長の様子を見て、大体の予想はついていたものの敬治は表情を引きつらせながら尋ねかける。

「あのー……今から何やるつもりなんですか……？」

その質問に部長は笑顔で答えた。

「見て分かるように、バスケットボールやるんだよ！ 魔術って、

科学からすれば、あまり意味ない研究だからね。こうやって、他の部活の手伝いしないと、部費が出ないんだ。じゃあ、敬治君は体操着に着替えてくれるかな？ 今日、身体測定あったのはちゃんと、知ってるんだよー」

「そう、なんですか……じゃなくて！」

「おお！ 一人でツッコんだ」

「魔術とバスケのどこが関係してるんですか！？ こんなので実力なんて見れる訳ないでしょ！！」

叫んだ敬治の様子を見て、部長は笑いながら、対応する。

「まあ、落ち着きなつてー。試合が始まったら、すぐわかる事だからさー」

軽く告げる部長を睨みながら、敬治は神津こうすの言っていた言葉を思いうす。

ホントに遊んでるだけじゃないのかよ……

敬治は部長の指示に従って、体育館にあるバスケ部の部室で体操着に着替え、体育館シューズを履いた。

東坂高校の男子バスケットボール部は弱小で、今、二・三年生合わせて七名と、五対五をするには人数が足りない。そのため、よく魔術部の力を借りて、魔術部を相手に練習しているのであった。

それが可能なのは、江藤が中学生の時、某強豪校のバスケ部に所属し、そこでレギュラーを勝ち取るほどの実力の持ち主だからだろう。他の二人と敬治は、てんで初心者である。

部長が部室から出て行くのと同時に、敬治も同様に体育館へと再度、足を踏み入れた。

すると、そこにはもう試合の準備ができていると言わんばかりに、センターラインと平行にバスケ部の五人が並んでいた。

全員、一七〇センチ以上の身長だが、一八〇センチを超える身長の者はいない。

それに対して、魔術部の四人も同様に一八〇センチを超える身長の者はおらず、ましてや初心者が三人。それ加えて――

「こっちの人数は四人なんですけど、一人はバスケ部の誰かに入ってもらうんですか？」

疑問に思った敬治が部長に対して質問すると、部長は首を横に振ってみせる。

「いや。この四人でバスケ部の五人と試合するよ。まあ、清二君は中学の時バスケやってたから、二人分くらいの戦力になるし、大丈夫だよ」

と、部長は答えてみせた。

――五対四。圧倒的不利な状況にも拘らず、何度も試合相手を頼んできている理由は、やはり、副部長である江藤の実力がよほどのものであるからであろう。

バスケで魔術の実力なんて……見れるわけないだろ……

そう思う敬治であったが、その思いも試合が始まるのと同時に打ち碎かれる事となるのであった。

「さあ、とっとと始めてしましましょうよ。三人とも」

と江藤が三人を呼んで、バスケ部の五人と向かい合うように魔術部の三人と敬治は並んだ。

やっぱり、バスケ部って言う雰囲気があるな……それに比べてこっちは……

自分の右横に並んだ三人を横目で見た敬治は小さく溜息を吐いた。どう見ても、運動するようなガラじゃない……副部長以外……

バスケ部の残りの部員二人が試合の審判で、タイマーと得点はマネージャーが務めるようだった。

「では、試合を始めます。礼！」

『お願いします』

敬治の気持ちとは裏腹に、挨拶を終えた魔術部とバスケ部は魔術部部长とバスケ部の部長だけが真ん中の線――センターラインの円の中に入り、その他の人物は円の周りで構える。

「勝ったら、江藤をうちの部活にもらうぜ？」

「こっちは負けないから、別にいいけど……？」

バスケット部長による強い眼差しを華麗に受け流しながら、魔術部部長は自らの眼鏡を中指で押し上げた。その瞬間に、審判によって、真上へと投げられたボール。それが最高地点に達し、落下し始めた時に二人は同時に飛び上がった。先にボールに手を触れたのはバスケット部長であった。

そのまま、バスケット部長がボールを自らの後ろへと弾こうとした時、魔術部部長はその口をにやりと歪めて、呟いた。

「Nidw^{ニドゥ}」

その呟きと共に魔術部部長が自らの手をボールを後方へと弾くように動かした瞬間、魔術部部長がボールに触れていないのにも拘らずに、その動きと呼応するかのようにボールはバスケット部長の手から零れ——魔術部部長の後方へと飛んだ。

ワンバウンドしたボールは魔術部部長の後ろで構えていた江藤の手に収まった。

バスケット部の三人はボールが真上に上げられた瞬間に後ろに下がって、コートの中分——ハーフコートからディフェンスをする気なのだろう。しかし、バスケット部の一人は江藤のディフェンスにうつと江藤の方へと走り出していた。

だが、もう既に遅かった。

敬治がオフENSEをしようと、バスケット部の部員が構えている方向へと走り出そうとした時、敬治の目に江藤の姿が映った。そして、江藤の意外な行動に思わず声を漏らしてしまう。

「えっ？」

敬治が捉えたのは、その場所からシュート体勢に入っている江藤の姿であった。

こんなところから、シュート！？

そう。まだ、センターラインも越えていないところから、江藤は自らの膝を曲げて、額にボールを持ってきていた。そして、江藤も先の部長と同様に何かを呟くのだった。

「If^{アイフ}er」

真上に飛んだ江藤は手首の力だけでボールを押し出す。その瞬間、江藤の掌から光と何かが爆発したような「ボンッ」と言う音が鳴り響き、ボールは江藤の手から離れ、大きな弧を描いた。

その場にいた全員が弧を描くボールを目で追いかけ、全員の目が捉えたのはリングに当たる事無く、網状の紐を通り抜けるボールの姿であった。

「シュパッ」と言う音と共に網状の紐を通り抜けたボールは体育館の床に落ち、その音によって茫然としていた敬治も我を取り戻した。

凄い……距離、空気抵抗、角度、強さ……一体、どれだけの事を計算したって言うんだ……？

敬治は心から江藤を凄いと思った。

江藤が、発動した魔術は火の魔術。

まず、魔術を発動するためには二つ、欠かせないものがある。一つ目は理解。即ち、ゴールまでの距離を推測し、どのくらいの熱量を放出すればいいのかを目で見て、頭で計算しなくてはならない。

それを自らの感覚でやる者も多数存在するが、その者たちは博打と経験によって培われたものの二つに分けられる。しかし、江藤はちゃんと、目で見て頭の中で計算して、魔術を発動していた（魔術部は何度もバスケット部と試合をやって、江藤は何度も使っているの少しは感覚も含まれる）。

そして、二つ目に魔術を発動するために欠かせないのは、“詠唱”であった。詠唱は魔術師たちの間ではArai^{アライ}と称されており、魔術の種類によって、Araiは異なり、強さもまた、異なる。

その為、覚えたAraiの数で魔術の勝負が決まる事も多々ある。

「さて、敬治君。こんな事でいちいち驚いてちゃあキリが無いよ！

ディフェンスディフェンス！」

「は、はい！」

晴れて、魔術部チームに「3」と言う数字が刻まれる。

バスケット部は江藤のシュートを何度も見ているため、驚く事は無く、

その分、攻守の切り替えも早かった。

すぐにセンターラインを超えて、魔術部の死守しなければならぬゴールのあるハーフコートにまで迫ってきたバスケット部の五人はいつもの自分たちのペースでボールを回していき、パスしたら他の場所へと移動し、またパスしたら他の場所へと移動する事を繰り返す。当然、誰のディフェンスにつくのか相談していない魔術部の四人は動く事無く、固まっている。

そのため、スリーポイントのラインからシュートを打たれるのは明白であった。

バスケット部の部長により放たれたボールは弧を描いて、ゴールに入る。

「遠くから打とうが、同じ三点だろう？」

笑みを浮かべて、江藤の方を見ながら告げたバスケット部長に対して、江藤は視線を向ける事無く、

「僕はリングに当たらなかったけど、田尻たじりさんは当たりましたーっと言う事で、僕の方が綺麗に入りました」

とバスケット部の部長である田尻の名と共にそう告げて、端の線――バックラインでボールを持った魔術部部长からパスをもらう。

先の発言を挑戦とみなした田尻は左足を軸にして後ろへと振り返る江藤の前に立ちふさがる。

「ダブルチームなんて事はしねえ……正々堂々！俺が相手してやる！」

ダブルチームとは一人に二人のディフェンスがつく事である。普通はダブルチームをして、ディフェンスを抜けなくなったオフェンスの最後の選択肢であるパスを阻止して、ボールを奪うのだが、元々、魔術部チームには四人しかいないので、江藤に二人ついた方が良いのであった。

しかし、田尻のプライドがそれを許さなかった。

「何としても止めてやんよ！」

と、決意を述べた田尻を他所よそに江藤は部長に告げる。

「部長。ちゃんとディフェンスしないと、多分、僕たち負けますよ？」

「ええ！？ それってヤバイじゃないか！？ 沙智ちゃん！ 早く、

“結界”張って！」

「はいはい。分かりました」

といって、腰を屈めながら、自分たちが守らないといけないゴールのハーフコートの床に指で何かを描き始めるこうず神津。

それに対して、部長と敬治は江藤に助太刀するべく、バスケット部の四人がディフェンスの為、構えている方向へと走った。

その瞬間、江藤は右足を前に突き出して、ボールをつくふりをして、その右足を田尻の右足の方へと出した。

自分の左に行こうとするのをフェイクだと読んでいた田尻は左に動いた後、すぐにその重心を右へと切り替えした。しかし———それもフェイクであった。

江藤は再度、右足を田尻の左足の方へと向けて、ボールについて、田尻を一瞬にして抜き去った。

「くそ！ パスは無い！ 四人でかかれ！！」

さっきまでの意気込みやプライドはどこへ行ったのか、怒りを露にした田尻がその声を荒げると同時にバスケット部の四人は江藤の前に立ち塞がる。だが、江藤はその四人の間を器用にすり抜け、レイアップシュートを決めるのだった。

すぐにオフENSEへと切り替えるバスケットチームはまた、さっきと同じようにパスを出してから他の場所へと移動して攪乱させる作戦を実行しようとしたのだが、

「いてッ！！」

と、スリーポイントラインからパスを出して、移動しようとしたバスケット部の一人が透明な壁のようなものに阻まれ、ボールを置いてけぼりにして、後ろへと倒れこんだ。

「な、なんだ！？」

「今日は運動神経が良い“あの二人”もサボってるし、結界を張ら

せてもらったのよ。あなたたちがスリーポイントラインより中には入れない結界を、ね」

そう説明した神津は「にこり」と微笑んで見せた。そんな神津の足下には自らが指で描いた円や文字が光って、浮き出てきていた。

「卑怯だぞ！ 藤井！」

「卑怯？ 初心者なんだから、これくらいのハンデをくれてもいいじゃないか！」

「ハッハッハッ！」と笑う部長を苦しい表情をしながら、睨みつける田尻。

「くそ！ それでも、スリーは打てる！ 絶対勝つぞ！」

そう叫んだ瞬間に置いてけぼりにされたボールを手にした江藤は田尻を抜き去り、スリーポイントラインからシュートを放ち、ゴールを決めた。

「無駄口叩いてる暇はないと思いますけどね。また、僕一人にやられますよ？ 田尻部長」

?. 電撃少年

試合はそのまま、スリーポイントラインよりも外でしかシュートを打てないバスケット部チームが魔術部チームのエースである江藤一人に押され、十分間の試合はもう、一分ほどしか残ってはいない。

本当は分かりたくなかったんだけど、「サボる」って言う理由が分かって気がする……この部って魔術なんて関係なく――

「きつい……」と肩で息をしている敬治が小声で呟くのと共に、魔術部チームがバスケットチームに十点の差をつけて勝っている状況の中、部長が一分間のタイムアウトを告げた。

――ただ、遊んでるだけじゃなかよおおお!!

心中でそう叫んだ敬治を他所^{よそ}に部長は江藤の方へと目を向ける。

「清二君! このバスケの試合の本来の目的はなんだ!?!」

集まった四人は円を作り、部長は声を張り上げた。

「この頃、運動不足だったから、これを機にちゃんと運動をしよ――」

と答えを紡いでいた江藤の言葉を遮るように部長は言葉を放つ。

「違う! 新入生で、魔術が使えるという敬治君の実力を見せてもらうためだろう!」

「いや、どうせバスケなんかで魔術の実力なんて見れませんよ。早く気付いてください。(クソ) 部長」

「ちよっと待って! 今、『クソ』って付けた!?! 『クソ』って!?!」

「つけてないですよ。(クソ)」

「もう、部長抜けちゃってるよ……」と項垂れる部長を無視しながら、江藤は敬治の方に目を向けた。

「敬治君。遠慮せずに魔術使っていいんですよ?」

「いや、でも……俺のはバスケとかで使えるような魔術ではないんで……」

「大丈夫ですよ。バスケ部の連中なんて、どうせ初戦敗退するんですから、怪我しても問題ないですよ」

いや、それよりも怪我させたりしたら、“魔術法”に触れるんですけど……!?

敬治が心中でツツコミながら溜息を吐いた瞬間にタイムアウトの一分間は終わりを告げ、試合が再開される事となった。

“魔術法”とは、魔術抑制の為に作られた法律の事である。魔術法の中には、勿論、魔術で人を傷つける行為などを禁止する項目もあり、魔術法を犯したものは、全ての魔術師を管理している魔術委員会が、罰則を与える事となっている。

“そして、去年、その法を犯した者が魔術部にもいたのだった”

「何でもいいですから、魔術使って!」

「わ、分かり……ました……」

段々と声を小さくしながら、敬治は眼を閉じた。

“この学校に入ってきた目的”を忘れてはいけない……そして、人を傷つけない程度に……

そう自分に言い聞かせながら、敬治は眼を開け、自らの右手を前に突き出す。

敬治の突き出した右手の先では、バスケ部の四人がディフェンスをしようと構えていた。

そんな敬治を後ろから眺めている部長と神津。江藤は敬治を見ながらも、田尻に取られないようにドリブルしていた。

そして、敬治は自らの魔術のArai^{アライ}を告げた。

「R i y e l e c t i c t」
ライヤレクティクト

その瞬間、敬治の右手は激しく光を発し、「ビリビリ」と言う音と共に小さな稲妻がバスケ部の四人へと迫り、直撃した。そして、四人のバスケ部員たちはコート^{コート}の床に倒れる。

その場にいた全員が、大きくその目を見開きながら、バスケの試

合中だということも忘れて、コート上に佇んでいる敬治を眺めている。

「敬治君……君は……電撃の魔術が使えるの……？」

辛うじて、そう発言した部長に対して、敬治は頷いて見せた。

「はい。それに、電撃の魔術を使う人が少ないのも知ってます……すみませんでした！ 電気を浴びせちゃって……」

と起き上がっていく四人のバスケット部員たちに謝る敬治。それに対して、「いいよ……こっちも試合してもらってるし……」と全員が微笑みながら、答えていた。

「ちよっと、心配だから、保健室に連れて行ってくる……」

と田尻がバスケット部の四人を保健室へと連れて行ったことにより、試合は続行不可能となってしまった。

「……じゃあ、俺たちは着替えて退散するのでしょうか……？」

部長のその言葉に三人は頷いて、バスケット部の部室で制服に着替えさせて貰い、体育館を後にした。



「それにしても……凄いよ！ 敬治君！」

と、魔術部の部室へと向かう途中で部長は目をキラキラと輝かせながら、立ち止まって、敬治の両肩に手を置いた。

「そして、そんな優秀な人材である君が魔術部に入ってくれるって言うんだから、もう……」

「感動のあまり、泣きそうだよ」と顔を俯かせ、右腕を両目につける部長。

その部長をスルーしながら、神津と江藤は敬治を連れて、廊下を進んでいく。

「えっ！？ ちょっと、扱い方が俺だけヒドくない！？」

右腕を両目から退け、自分の目の前に誰もいない光景を見た部長は先を行く三人を追いかける。しかし、次の瞬間に部長は自らの足

を止めて、後ろを振り返った。

「……誰かに……つけられてる……？」

「中二病患者みたいな事、言うのやめてもらえませんか？ 魔術部が中二病みたいに思われるので」

「ヒドッ！？」 てか、立ち止まるくらいしてよ、清二君！！」

と、三人の姿を追った時にはもう、三人は魔術部部室の前に着いており、ドアを開けて、部室に入っていた。

部室に入ると、一番最初に目に入るのが、大きな長方形の机で長い辺にパイプ椅子が二つずつ入れられている。そして、その先には部長専用の机があり、左側には棚。右側には小さなホワイトボード以外、何も存在していない。

三人はパイプ椅子に座り、後から来た部長も部長専用の机には向かわずに、パイプ椅子にその腰を下ろした。

「で、魔術部について何か質問ある？」

「いつも、今日みたいな事してるんですか……？」

「分かったでしょ？ 遊んでるって言った意味が」

呆れた表情で言う神津の言葉に賛同した敬治と江藤は頷く。

「いや、遊んでるわけじゃない！ ちゃんと、バスケット部を手伝った！ 断じて、遊びではない！！」 そして、敬治君！ 質問に誠意が見られないよ！ もっと、こう『あのジャンプボールの時は何やってんですか？』みたいな質問は無いのかね！？」

机を「バンッ」と両手で叩きながら、敬治の顔に自らの顔を近づける部長。耐えかねた敬治はその質問を繰り返した。

「……『あのジャンプボールの時に何やったんですか？』」

「よくぞ聞いてくれました！ あの時、俺は風の魔術の A r a i を唱えて、ボールを風で動かしたんだよ！」

いや……それくらい分かってるよ……

溜息を吐きそうな呆れた表情をする敬治。その表情を見て、「ここが潮時かな？」と思った部長は立ち上がって、はきはきと告げる。「じゃあ、今日の部活はお終いつて事で！ 敬治君も帰っていいよ

」

その言葉と同時にゆっくりと立ち上がった敬治は部室の扉の方へと向かい、その扉を開けた。

「入部届！　ちゃんと担任の先生にサインもらって、出しといてね？」

「分かりました。さようなら」

「じゃあねー」

「バイバイ」

「さよならー」

魔術部部室から出て行った敬治。それから数秒してから部長は溜息混じりに自らの机の椅子に座って、二人に告げる。

「まさか、“あいつ”と一緒に、電撃の魔術が使えるとはねえ……なんか、去年の事思い出しちゃったなあ……」

苦笑する部長に対して、真剣な顔の江藤は心配の色を見せながら、尋ねる。

“去年の夏みたいなさ”は……もう、起きないですよね……？」

「いいや。多分、“あいつ”は今年も事を起こす。けど——去年みたいに好き勝手にはさせねえから心配すんな！」

江藤と神津に向けて微笑んだ部長だったが、二人は不安そうな顔色を濃くした。

「好き勝手にさせない？　冗談でしょ？」

「そうですよ。（クソ）部長。今度は——」

二人は部長へと真剣な眼差しを向けながら、言い放つ。

「——僕たちも一緒に戦いますよ」

◇

次の日

なんか……俺、疲れてる……？

自転車のペダルを漕ぎながら、「はあー」と溜息を吐いた敬治は信号が赤になったため、ブレーキをかけた。

でも……“谷崎先輩と同じ、電撃の魔術”を使う俺を見て、あの三人も驚きとは違うような評定してた……やっぱり、あの三人は谷崎先輩がどうして、会長を暗殺するような事をしたのか知ってる……にやりと自らの口元を歪める敬治だったが、すぐにその口を元に戻した。

焦っちゃ駄目だ……魔術委員会に口止めされてるだろうから、関係を良くして、じっくりと聞き出さないと……

ゆっくりと息を吸って、吐いた敬治に、一人の人物が声を掛けた。
「何、朝の良い空気を吸ってんだよ。敬治」

右から急に聞こえてきた声に、振り向いた敬治。その目に映ったのは同じ中学で、同じ東坂高校に通っている敬治の友達であった。

「裕太か……びっくりさせんなよな……」

「びっくりするような事考えてたから、びっくりしたんだろ……？ お前って、八組だっけ？ 良い女子生徒いたか？」

「んな事、考えてねえよ！」

「分かってるって。そんなムキになんなよ……ホントお前は真面目過ぎんだよ。そして、それに気付いてないのが天然」

信号が青へと変わり、自転車のペダルを漕ぎ始める二人は並列しながら進んでいく。

「うるさいなあ……」

「まあ、それはいいとして、お前、やっぱり魔術部入るんだろ？」

裕太の尋ね掛けに対して、頷く敬治。しかし、裕太は首を横に振ってもらいたかったらしく、溜息を吐いてみせた。

「やめとけて。東坂高校の魔術部の評判って去年の事件のせいで悪すぎだぜ？ それに廃部の話も出たって言うし、今存在してるのがそもその間違い。最悪、いじめられるぞ？」

「だとしても、俺は……知りたいんだ……」

顔を少し俯ける敬治に「前見ないと危ないぞ」と忠告した裕太は

少し、ペダルを漕ぐスピードを上げた。

「……まあ、俺なんか首を突っ込んでいい話じゃなかったようだな」



土曜日だったこの日は二時半には全ての授業が終わりを告げ、部活をしていない者は帰り、部活をしている者は部活へと行く。敬治もその部活に行く者の例外ではない。

今日の朝、HRの前に担任の先生に印鑑をもらい、昼休みに部活の顧問の先生に入部届を提出したため、今日から正式に敬治は魔術部の一員になったと言う事になる。

敬治は教室で自分の席の引き出しから鞆に教科書やノートを入れながら、溜息混じりに思った。

はあ……裕太の言う事は的を射てた……ホントに入部届を出して正解だったのか？ って今更、思ったところで後の祭り、か……

「よし！」と言う言葉を漏らし、鞆に全ての教材を詰め込み終わったと思った敬治が、教室から出ようと振り返ったとき、敬治の目の前には一人の女子生徒が立っていた。

——だがしかし、全て入れ終わったと思っていた敬治の教材は、まだ、自らの引き出しの中に残ったままであった。

「よっス斉藤くん！ こうやって話すのは初めてだね！ 魔術部に入部したんだってえ？」

「わあ!？」

思わず声を上げた敬治が見下ろしている女子生徒は背丈が一五四センチほどと、敬治との身長差は四捨五入すると、二十センチにも及ぶ。小柄な彼女の左目には白い眼帯がされており、右目は丸く、顔も丸い。髪は首の後ろで二つ結びをしていた。

そんな彼女を見て、自らの頭のアンテナを揺らした敬治は反射的にその言葉を漏らしてしまった。

「ちっさ……い……」

「『ちっさい』言うな！　それでも、一年に一センチは伸びてるんだからねっ！」

一センチって……

心中でツツコミながら敬治は訝しげな表情で彼女を見下ろす。すると、敬治の表情から察した彼女は自己紹介を始めるのであった。

「失敬失敬！　自己紹介まだだったね！　わたしは桐島雪乃きりしま ゆきの！　斉藤くんは斉藤敬治くんだね？　わたしって、記憶力だけはいいんだあ！　だから、自己紹介の時にみんなの名前全部覚えちゃったの

！」
「凄っ……！」

目の前の雪乃との温度差に気圧されながらも、敬治は言葉を發した。

「でしょでしょー！？　まあ、その話は一先ず、置いてー。わたしも、魔術部に入部しようと思ってるんだあ！」

と担任の印鑑がまだ押されていない入部届を敬治へと見せつける雪乃は「にっこり」と微笑んで見せた。

「でも、やっぱり入部届出す前には見学しておいた方が良いでしょう？　だから、今日は魔術部を見学しようと思って！」

「……そういう事なら、多分、大歓迎だと思うけど……？」

「ホント！？　じゃあ、魔術部の部室までレッツゴー！」

後ろを振り返る雪乃は教室の出入り口に向けて、右拳を突き出しながら、教室から出て行く。そして、雪乃に続くように敬治も教室から廊下に出ると、敬治の右側には雪乃が敬治の方を向いて存在しており、頭を掻き、照れながら小声で言った。

「わたし……魔術部の場所……知らないんだった……」

?. 眼帯少女

魔術部の場所を知らないと言う雪乃ゆきのの隣を歩く敬治けいじは左目に付けた白い眼帯について、尋ねてみる。

「左目怪我したの……?」

「あっうん! わたしドジだから、電柱にぶつかっちゃって……」

「てへへ……」と頬を紅く染める雪乃に「そんな事あるのか……?」と心中で疑いながら、敬治は黙って、次の質問へと移った。

「魔術使える?」

「ううん。使えないよー! けど、魔術って何だか、面白そうじゃん? だから、魔術部に入ってみたいんだあー」

笑顔で答える雪乃を見て、敬治は今日の朝、裕太ゆうたに言われた言葉を思い出し、雪乃へと思い切って、尋ねた。

「この学校の魔術部って、印象悪いけど……気にしてない?」

「うん! 別に気にならないよ!」

気にならないなら、あまり言わなくてもいいな……

ほっと息を吐いた敬治と雪乃はそうしている内に二階にある魔術部の部室へと着いた。

敬治は入り口の扉を四回ノックすると、テンションの低い部長がその扉を中から開け、顔を覗かせた。

テンションが低いのは多分、江藤えとうが原因だろう。

「……? 誰? その子……?」

その低いテンションのまま、敬治へと尋ねる部長。それに対して、答えようとした敬治を右手で制した雪乃は、部長の前に立つと、大きな声で告げる。

「魔術部を見学に来ました! 桐島雪乃って言います!」

「おお! 見学!? それなら、大歓迎だよ! さあ、中に入っ入って!」

いつもどおりのテンションを取り戻した部長は、扉を完全に開き、

雪乃と敬治を部室へと入れる。

「お邪魔しまーす」と言いながら、入った雪乃を迎えたのは副部長である江藤と二年生の部員である神津こうずの視線だった。

「部活見学しに来た桐島雪乃ちゃん」

「宜しく願います!」

部室にいた江藤と神津に入ってきた雪乃の紹介をした部長は、今度は二人を雪乃に紹介し始める。

「立っている男子生徒がこの部の副部長の江藤清二君せいじで、椅子に座ってる女子生徒が二年生の神津沙智ちゃんさち。部員はあと、三人いるんだけど……サボリ……そして、俺がこの部活の部長である藤井亮ふじいりやうなのだ!」

部長は両手を腰に当てて、胸を張り、偉そうな姿勢とる。部長のその姿を見ながら、冷たい視線を送る三人だったが、雪乃は眼を輝かせながら、拍手をしていた。

「部長さんだったんですね! どおりで、オーラが違うと思いました!」

「いやー……それほどもあるけどね?」

笑う二人に対して、尚も三人は冷たい視線を部長へと送り続けた。
「けどー……今日は特にやる事は無いんだよねえ。バスケ部は昨日行ったし……てか、雪乃ちゃん、魔術ってどんなものなのか知ってる?」

首を横に振る雪乃に部長は笑顔で、

「よし! じゃあ、俺が物凄く、分かりやすく、魔術について教えてあげるよ!」

と、銀縁眼鏡をクイツと上げ、埃まみれのホワイトボードを長方形の机へと近づけ、ホワイトボードと雪乃で机を挟むようにパイプ椅子へと雪乃を座らせた。

「魔術を使うにはまず、その魔術を理解する事が欠かせないんだよ。だから、勉強しなくちゃ、魔術は使えない。そして、魔術を使う時には魔術ごとに存在する詠唱——アライAr aiを唱えから、Ar aiも

覚えないといけないんだ。だから、“俺のように”頭が良い人じゃないと、魔術は扱えないと言うわけなんだよ！」

ホワイトボードも併用して、魔術の説明を簡単に説明した部長はまたまた、偉そうに両手を腰に当てる。そして、当たり前のように雪乃以外の三人は冷たい目でその姿を見るのだった。

「えっ！？　じゃあ、魔術って呪文を言うだけじゃ駄目なんですね！　呪文を言っただけで、物を浮かせたりできると思っていました！」

「呪文じゃなくて、A r a i ね。それと魔術と魔法が違うって言うのは知ってて貰いたいんだ。魔術はあくまで、科学力で行えるもの。その他の空を飛んだりとかって言うのは魔法で、魔術とは別物なんだよ」

「何だか、難しいですね……」

眉間にしわを寄せて、頭をフル回転させている雪乃を部長は笑いながら、思案する素振りを見せた。

「さて、今日はどうするかねえ……清二君、雪乃ちゃんも来たんだし、何か良い案ないかい？」

そんな部長に対して、江藤はぼつりとアイデアを呟いた。

「二人に学校を案内すればいいんじゃないですか？　まだ、入学して日も浅いですし」

「流石、清二君！！　ナイスアイデア！　と言う事で、今日は敬治君と雪乃ちゃんに学校を案内しようと思います！」

江藤のアイデア採用によって、東坂高校を二人に案内するのが今日の活動と決まるのであった。

東坂高校の校舎はU字型になっている。勿論、縦二本の校舎と横の校舎は垂直に交わっている。

五階建ての校舎の縦二本の校舎は三階まで全て、各クラスの教室となっており、部室や書道室などの特別教室は五階か、横一本の校舎に集中している。

敬治と雪乃のクラスである一年八組のある校舎は、一階の縦二本

の校舎の左の方だ。魔術部は、と言うと、U字の横の校舎の二階に位置している。

一階の縦二本の校舎は全て、一年生の教室で、二年生の教室も二階の縦二本の校舎、三年生の教室も三階の縦二本の校舎にある。

運動場は全て人工芝グラウンドとなっており、U字の縦の左側の校舎から横の校舎までL字に広がっている。

体育館もU字の左側の端に存在しており、その一階はトレーニングルームや柔道、剣道場となっており、本当の体育館があるのは二階である。そのため、魔術部部室からは階段を上らず事無く、廊下を歩けば、体育館へと行けるようになっていた。

「はい。此処が生徒会室ね。物壊した時にはすぐに此処へ来るんだよー」

そう言いながら、部長は三階のU字型の横の校舎に存在するドアの上に『生徒会室』と書かれたところを指差した。

物壊した時……ってやっぱり壊したりしてるんだ……

敬治は少し、予想のついていた事に驚きはしなかったが、その予想を否定したかった。何故なら――

此処で生徒会の人と顔を合わせる事になったら……長引きそうだ

……

と思ったからであり、その予感は的中する。

「藤井！ てめえは人の城の前で何してやがんだよ！」

廊下を走って、生徒会室を守るように生徒会室の前で止まった男は部長の胸倉に掴みかかった。

「おいおい！ また、今年度の予算を書き換えようって鍵壊しに来たんじゃねえだろうな？」

「そんな訳無い！ 俺はデスクワークはだから、そんな横暴なマネはできないよー」

「おい、江藤。こいつ一発殴ってもいいのか？」

左手だけで、部長の胸倉を掴んだ男は空いてる右手を握り締め、

部長へと近づけていく。

「まあ、一発くらいならいいんじゃないかな？ それと、一応、言っとくけど、藤井さんは君の先輩だからね？」

江藤の言うとおり、男は生徒会の一員の二年生。部長の方が、先輩なのであった。

「そうそう。敬治君の言うとおり、先輩はちゃんと、尊敬し——つぶべあ——！」

結局、生徒会の男に殴られてしまった部長は左頬を押さえながら、顔を俯ける。それに対して、生徒会の男は胸倉を掴むのをやめて、部長に背を向けた。

「それよりも、魔術部にいる“あいつ”の服装とかちゃんと、させとけよ！ いいな！」

そう言った後、生徒会の男は生徒会室のドアを開けて、そのドアを勢いよく閉めた。

「うっ……親父にも打たれた事ないのに……」

「部長。その台詞はアウトですよ」

某主人公の真似をする部長に対して、淡々と言葉を述べながら、江藤はいつまでも頬を押さえている部長を追い越して、先を進んだ。そして、残る三人も、部長を置いて、江藤について行った。

「えっ！？ ちょっと、スルーしないでよ！ ホントに痛かったんだから！」

そんな東坂高校のU字型校舎の教室を全て、回っていった魔術部部員一同と雪乃。雑談をしながらの教室巡りは、本人たちには一瞬の時間に思えたが、時はもう既に、夕刻に迫っていた。

空が橙色に染まっているのに気付いた部長が腕時計を確認すると、時刻は五時半を回っていた。

「うわっ！ もう、こんな時間じゃないか！ 学校は一通り案内したし、今日の部活はこれまででってことでいいよね？」

部長の尋ね掛けに対して、その場にいた全員が頷くのを確認すると、部長は雪乃へと視線を移した。そんな雪乃は学校を巡る時の雑

談の中で「この部活に入ります！」と安易にそう部長に告げていた。
「じゃあ、雪乃ちゃんは今後日！ 担任の先生に印鑑もらって、顧問の先生に入部届提出しといてね？」

「はい！」

笑顔で答える雪乃に対して、部長も微笑んだ。

「って事で今日は解散！」

その言葉と同時に、魔術部の五人はまた、雑談を交わしながら、ゆっくりと靴箱へと動き出した。



そんな昨日から二日間の魔術部の行動を監視していた人物が一人いた。

東坂高校は上靴を指定しており、その上靴に入った二筋の線の色で、学年を分けている。一年生は緑、二年生は赤、三年生は黒、と統一している。その人物は赤色である事から、二年生だと言うことが分かる。そして、学ランを着ていることから、男子生徒だと言うことも一目瞭然だ。

その男子生徒は、魔術部一同が解散し、靴箱へと向かっていくのを確認してから、携帯電話スマートフォンをポケットから取り出した。

男子生徒は指を滑らせながら、電話帳を開き、そこに名前のあった人物へと電話をかけた。

「トゥルルル」の連続した音が男子生徒の耳へと届く中、それは急に「プツン」と切れ、誰かの声が入って来た。

『もしもし』

「二日間の尾行で得られた情報は昨日の『風・火・電撃』の三つだけでした。電撃は非常に珍しい魔術ですが、ほうっておいても特に問題はないでしょう」

『電撃か……』

その言葉を聞いて、何かを思い出しているような沈黙をする電話

の相手の反応が気になった男子生徒は尋ねる。

「何か、思い当たる節があるのですか？」

『ああ。中学の後輩に“俺と同じ”電撃の魔術を使う奴がいてな……少し、そいつの事を思い出した』

「……あなたにもちゃんとした『思い出』と言うものが存在したんですね……あなたの思い出は全て、闇に吞まれているのかと思っていましたよ」

『失礼だな？ 俺にだって、思い出はある。“去年の事”だって、俺にとっては思い出だ。そして、今度は確実に成功させる。その為に、お前と彼女にはその指令を下した』

「分かってます。それで、成功させるために、どうしますか？ もう少し、情報を得られるかもしれませんけど……？」

男子生徒の尋ね掛けに電話の相手は思案しているような沈黙を連続させ、答えを紡ぎ出す。

『やはり、それだけだと情報が足りない……だが、お前と“魔眼”がいるんだ。“あれ”の周りに結界を張っていようが、相手が魔術を使って抵抗しようが、“魔眼”の前には無意味な事だろう？』

「そうですね……しかし、“魔眼”をそこまで過大評価してもいいのでしょうか？ まだ、あれにはリスクがあると聞いてますが？」

『問題ない。それとも、“俺が作った作品”にお前は、不満があるとしても言うつもりか？』

その問いに男子生徒は息を詰まらせ、電話の相手には見えないので意味はないが、首を振りながら答えた。

「いいえ。そんな事はございません」

『それでいい。彼女、魔眼には「明日の日曜日に決行しろ」と伝えておけ。明日はまだ、お前は監視しているだけでいい。“魔眼”のデータも取りたいしな』

「分かりました。それで、もし、戦闘せざるを得ない状況になった場合には彼女はどうすれば、いいのでしょうか？」

『愚問だな——』

電話の相手の男は思案する間など置く事無く、その続きを紡ぐ。

『――法に触れても、構わない…………――殺せ』

「御意」

スマートフォン画面に指を滑らせて、電話を切った男子生徒は再度、電話帳を開き、そこにあった女性の名前を押して、電話をかける。

「もしもし……明日、決行になった。他の魔術の対応は別に良いと思うが、電撃の魔術だけは対応を考えたい方がいぞ……魔術部が抵抗するようだったら、迷わず殺せ。健闘を祈る」

？. セーラー服と日本刀

その夜。敬治は月曜日の朝課外、0限にある現代文の予習をしようと、自らの鞆を探った。しかし、鞆の中には肝心の現代文のノートだけが存在していなかった。

あれ？　もしかして、学校に忘れてきた……？　くそ、現代文つて月曜の朝課外からじゃん！　朝早く行って、やるのも嫌だしなあ……

思案する敬治が辿り着いた答えは、仕方ない……日曜だけど、部活はあってるから学校は開いてる……だろう。午前中の内に取りに行くか！
と言うものであった。

自らの頭に飛び出したアンテナを揺らしながら、敬治は意味もなくベッドへと横になった。そんな敬治の目に映ったのは、いつもどおりの白い天井であった。



次の日

その朝、敬治は八時半にセットしておいた目覚まし時計の音で目を覚まし、いろいろと準備をした後、午前九時には制服をその身に纏って、家を出ていた。

自転車で通学している敬治の家と東坂高校との距離はそう遠くはない。自宅から高校までの所要時間は三十分前後であった。

眠い……

敬治はそんな事を思いながら、自転車のペダルをゆっくりと漕いで行き、三十四分で学校に辿り着いた。

U字型の校舎の横にある体育館。その更に横には三階建ての駐輪

場が存在し、敬治はその二階に自転車を置いて、体育館横の道を進んでいく。そして、一分経つか経たないかくらいの時間で校舎へと辿り着いき、廊下を歩いた。

敬治の教室はU字型の縦の左側の校舎の一階であるため、廊下を歩くのにそう時間は掛からなかった。

鍵の開いている教室へと入って、自らの机の引き出しを腰を下ろして除いた敬治は、

「あつた！ あつた！」

と声を上げながら、現代文のノートを引き出しから取り出し、微笑んでみせた。

無事、目的を達成した敬治は帰ろうと、教室から出る。すると、誰かが小走りしていくような足音が廊下に鳴り響き、敬治は咄嗟に右へと振り向いた。

その瞬間、敬治の眼に一瞬だけ、部長が二階への階段の方へと早歩きで向かっているところが目に入った。

「部長……？ どうしたんだろう……」

血相を変えた表情で早歩きで向かっていった部長の姿が敬治の不安を掻き立てた。

階段の方に行ってたって事は、部室に向かっていたのか……？
なんか、気になるな……行ってみるか。

そう思った瞬間にはもう既に、敬治は右の方向へと身体を向け、右足を一歩、前へと踏み出していた。



二階——魔術部部室——

敬治が早歩きで階段の方へと向かっていった部長を目撃する数分前。一人の人物が魔術部部室の扉の鍵を無理やりこじ開けて、入っていた。

その人物は東坂高校の“セーラー服”をちゃんと、その身に纏っており、上靴に入った二筋の線の色が緑である事から、一年生と言うことも分かる。

中に入って、ゆっくりと部室のドアを閉めた女子生徒は、部室を少し見回して、最終的にその視線を部室にある棚の方へと落ち着かせた。そして、棚の方へと近づいていった女子生徒はその棚にあった“あるもの”へと手をのばした。

その“あるもの”とは、敬治がこの部室に一人で入った時に見入ったもの——ガラスケースに入れられた全ての面が金色に輝く、ルービックキューブのようなものであった。

女子生徒は金色のキューブの入ったガラスケースへと触れた時、何かの詠唱——*Arai*^{アライ}を唱えた。そう。彼女は魔術を使えるのであった。

すると、その瞬間、金色のキューブを囲っていたガラスケースは粉々に飛散し、金色のキューブは完全に無防備な状態となった。

「これで……終わる……」

女子生徒は何か、ほっとしたような微笑みを浮かべる。それと同時に、金色のキューブを右手で鷲掴みにした。

「——ッ!？」

だがしかし、次の瞬間に金色のキューブを中心にして、光を発する大きな円が彼女の足下に現れ、彼女を囲むようにその円はキューブから広がっていき、キューブを中心とし、半径二メートルの位置で停止し、今度はそれよりも小さな円が六つ、彼女と大きな円の間を埋め合わせるように並んでいった。そして、各円の中に異様な文字が現れた。

それは一昨日、体育館でバスケット部と魔術部がバスケットボールの試合をした時に、神津がコート上に描いていたものとはほぼ同じであった。神津が描いたのと違うところは、地面から現れた円の数だった。

“七円陣結界”^{しちえんじんけつかい}……しかも“地雷式”のようね……

自らの足下に広がる円を睨みつけながら、キューブを持った女子生徒は舌打ちをしてみせる。

“七円陣結界”とは、その名の通り、七個の円から形成される結界の事である。

結界はそれを形成する円の数によって、その強さは比例する。結界を形成する円の数の最大は十五であり、十五もの円を描ける魔術師は日本にはいないとされている。その事からも十五の円を描くのが難しいのは明白だ。

それと同時に、十円陣結界も描ける魔術師は過去を遡^{さかのぼ}っても一人しか存在しないと、言われており、その理由は未だ、不明である。そして、彼女が心中で呟いた“地雷式”と言うのは、そのままの意味合いである。何かの条件を付け、その条件によって、魔術が発動する事。つまり、今回の結界が発動する条件は、ガラスケースが割られても結界が発動しなかった事から、キューブに触れる事であったようだ。

簡単には解けそうにないわね……

そう彼女が思った瞬間に部室の扉が唐突に勢いよく開かれ、ある人物が魔術部部室に姿を現した。その人物は先程、敬治が見た人物——魔術部部長の姿であった。

右手の中指で銀色の縁の眼鏡をクイツと上に上げ、女子生徒を睨みつける部長は、溜息を吐いた。

「まさか、お前がキューブを狙っていたとは……——」

眉間にしわを寄せる部長に対して、女子生徒は「にやり」とその口元を歪めた。

「——桐島雪乃^{きりしまゆきの}」

そう。女子高生は昨日、魔術部を見学しに来た身長一五四センチ

で左目に白い眼帯をしている桐島雪乃本人であった。

「やっぱり、簡単にはキューブを盗らせてはくれなかったか……？　そりゃあ、キューブは“重要なもの”だもんね……——人類の命運を分けるほどの」

その言葉を聞いた瞬間に部長は睨みつける視線をより一層、鋭くした。

「誰の命令でキューブを奪いに来やがった……！？」

その質問を聞いた雪乃は「フフフ……」と笑ってみせる。

「部長さんもご存知の“あの方”の命令だよー？　で、部長さんは何しにきたの……？」

その瞬間、目を大きく見開いた部長はその後、段々とその目の色を深い黒へと変化させていく。それは氷点下のように冷たい眼差しであった。

「……俺は魔術委員会にキューブを託された者の一人だ。だから、それを絶対に渡すわけにはいかない！　大人しく退かないって言うんだったら、俺はお前を——迷わず殺す」

右手を雪乃に向けて翳す部長。しかし、雪乃はそんな部長の言動を嘲笑った

「できるの、部長さんに？　去年の夏もそれができなかったから、今、こうしてキューブが奪われようとしてるんだよ？　それに部長さんも腹部に大怪我を負う事になったんでしょ？」

その発言を聞いて、部長は情報がだだ漏れだと言う事を理解した。そして、さり気なく、部長は自らの右脇腹を右手で触れた。

そう。部長は去年の夏に腹部に大怪我を負い、今では早く走る事が叶わなくなってしまうていた。

「それに、この結界。わたしの脚だけを動けないようにしたのは部長さんが自分で捕まえられるって思ったから？　だったら、部長さんは判断ミスしちゃったみたい。脚以外の部分全部動かせるんだもん。こんな薄っぺらい結界なんて、わたしの手で———すぐに壊してあげるよ」

そう告げた瞬間に、彼女はキューブを持っているために塞がっている右手とは逆の左手で、左眼の白い眼帯を外してみせた。

その眼帯が外される事によって、露あらわとなった左眼は未だ、閉じられている。そして、左手に持った白い眼帯を左ポケットに押し込むのと同時に、彼女は自らの左眼を開いてみせた。普通の人と何ら、変わりないと思われた彼女の左眼であったが、その黒目の部分には大きな円と、その辺に串刺しになった小さな円が並んだ紋章のようなものが刻み込まれていた。

そんな彼女の左眼を見て、少し、驚いた表情を見せる部長。

「驚くにはまだ、早いと思うけど？ 部長さんがわたしの左眼に見とれてる内に、ほらっ」

と、雪乃は自らの左手に握った日本刀を部長に見せつけた。

その刀は、何も持っていなかった左手から、一瞬の内に出現した物であった。

自らの笑みをより一層、濃くしていく雪乃は握った刀を振り上げる。

「わたしの言ったとおりでしょ？ 部長さんはわたしを殺せない」

瞬間、彼女は左手に握った刀を振るい、自らの周りを取り囲む結界を粉々に砕け散らせた。そして、部長は雪乃と応戦するべく、Araiを唱えようとしたのだが、それよりも先に雪乃がAraiを唱えてみせた。

「Sundob of a cserad lace」
サンドアップ オブ ア クセレッド ラベック

その瞬間、彼女を中心として、大きな円が一つとその中に小さな円が七つの八円陣結界が展開され、部長はそれを見ても尚、Araiを紡紡ぐごうとした。

結界は一昨日、神津こうずがしていたように自らの手で描いて展開もできるが、Araiを唱える事によっても、展開する事ができる。しかし、自らの手で描いた方が、を唱えるよりもより強力な結界を展開する事ができるのだった（魔術師の力量によっては同等の場合も

ある)。

ニードゥ
「Nidw」

部長の右手から放たれた風は雪乃の展開した結界に当たった瞬間に飛散し、雪乃に届く事はなかった。

「あらあら。風の魔術でも最低の魔術のAraiを唱えるなんて……八円陣結界が見えなかったかしら？」

「違う……俺の魔術はただの……条件だ」

その言葉を聞いた時、雪乃は目を大きく見開き、自らの足下を見た。次の瞬間、彼女の展開していた結界が碎け、もう一つ円の多い九円陣結界が展開された。そして、彼女は完全に身体を動かせない状態になった。

「九円陣結界を発動する条件が風の魔術のAraiを唱える事だったのね……それに、今度は脚だけじゃなく、全部動かせなくなった……」

部長は身体を動かせない雪乃に一步一步近づいていく。

「キューブを渡して貰うぞ」

「フッフ……ダメね。勝利を確信したからってわたしに安易に近づいてくるなんてね——」

その言葉を聞いた瞬間に部長は自らの身を後ろへと退けようとした。だがしかし、それよりも先に彼女を取り囲んだ結界が破壊され、動けるようになった彼女は刀を下に向けながら、部長の方へと突っ込んだ。

「——観察力が無いわね。わたしの魔眼は——“具現”よ」

振るわれた刀は部長の腹を斬り裂こうとした。しかし、部長が足を躓かせた事により、その刃は部長の腹を掠るのみに留まった。

「運の良い男ね」

そう言って、雪乃は左手に持った日本刀を一瞬で消し、部室の扉を開き、走って出て行った。

「待て！」

制服を斬られ血が滲んでいく中、部長は雪乃を追いかけようと腰を上げ、部室のドアを勢いよく開いた。そんな部長の目の前に今起きている状況が全く、分かっていない敬治の姿が現れる。

「――敬治君!？」

「部長。そんなに急いでどうしたんですか……? 桐島も今、走って出て行きましたけど……って怪我してるじゃないですか!？」 保健室に行かないと!!」

敬治の心配そうな表情を見て、部長は自らの斬られた腹ではなく、右脇腹を触った。そこは去年の夏に大怪我したところだった。

「俺の事はいいから、雪乃を追って! 彼女の持つてるキューブが“あいつら”の手に渡ったら、人類が終わるかもしれない! お願いだから、彼女を殺してでも、キューブを奪わせないでくれ!」

あいつら……!？ まさか、谷崎先輩たにざき先輩に関係のあることなのか……? だったら……

廊下に血を垂らし、苦しい表情を浮かべて頼む部長の顔を見て、敬治は首を縦に振った。

「“あいつら”の説明は後でちゃんと、してくれるんですよ?」

「ああ……必ずする……だから、キューブを!」

「分かりました」

その言葉を聞いた、敬治はすぐさま、雪乃が走り去った方向へと、走り出した。

雪乃が部長に対して、何をしたのか分からない敬治を突き動かししたのは、部長の真剣な表情から、状況が芳しくない事を察したことで、谷崎の情報を得られるかもしれないという希望であった。

?. 降雷の魔術師

女子の脚力が男子に勝ると言う事は無く、校舎の隣にある体育館のとなりの道でやっと、敬治は雪乃に追いつき、一定の距離を保った二人は立ち止まって、雪乃ゆきのは後ろにいる敬治けいじの方へと振り向いた。「左眼、怪我したんじゃないかなかったんだな……」

「そーゆーこと。でも、わたしにとって、この眼は傷と同じなのかもしれないね……」

目線を敬治から逸らし、左目を左手で触れる雪乃。

「どういう意味だ……?」

「斉藤くんに話したところでしょうがないでしょ?」

そう言って、雪乃は再度、その目線を敬治の方へと向ける。

「斉藤くんは電撃の魔術が使えるんだって? 凄いね。わたしには魔術の才能さえ、乏しいのに……」

苦笑いをしてみせる雪乃の表情を見ていた敬治はその視線を彼女の右手にある、金色のキューブへと移した。

「……そのキューブ。部長は『あいつらの手に渡ったら、人類が終わるかもしれない』って言ってた……一体、お前が持つてるキューブって何なんだよ……?」

説明するのが面倒くさいのか、雪乃は溜息を吐いてみせ、その後、敬治の後ろへと視線を向けた。それが気になった敬治が後ろを振り返ると、腹から血を制服に滲にじませた部長の姿がそこにはあった。

「部長! ? 早く、保健室に――」

「大丈夫だよ、敬治君……それより、俺が代わりに説明しよう……魔術と魔法は違う。科学力でも可能な事を魔術と呼び、科学力では行えない空想的な事を魔法と呼ぶ……俺たちが使ってる結界ってのはちよつと異質で、例を挙げると、真っ白く何も無い部屋に入ろうとする時、その雰囲気から部屋に何となく入りたくない気持ちが出てきたりする。それが結界の根源だ。物の位置や部屋の構造などで

視覚的に脳を混乱させる。だから、五円陣結界^{ごえんじんけつかい}までは魔術的攻撃を防ぐ事はできない。けど、七円陣結界からは魔術的攻撃も防げる。つまりは、七円陣結界からは魔法の部類に入るんだ」

敬治がちゃんと理解しているのかが気になった部長は敬治の表情を一瞬だけ窺った。しかし、気にする必要は無かったようで、部長は話を続ける。

「少し、無駄話をしちゃったね。これからが本題。彼女の持つてるキューブにはそれ自体に一生をかけても使い切れないくらい的大量の魔力が封印されていて、それを持つただけで、魔法が使えるようになってしまう。そして、“広島・長崎に落とされた原子爆弾ほどの威力”を持つ魔法も使えてしまう……」

「——ッ!?　　なんで、そんなものを部長が持つてるんですか!?!」
「魔術委員会の会長に託されたんだ……理由は分からない。けど、こいつらをおびき寄せる為に、このキューブが使われている事は確かだ」

その目を大きく見開かせた敬治は彼女の持っているキューブを見た。

「敬治君。驚くにはまだ、早いよ。彼女の左眼も多分……彼女の持つてるキューブと同じようなものが埋め込まれてるよ」

敬治は雪乃の右手に握られたキューブから彼女の左眼へとその視線を移す。すると、雪乃は「にやり」とその口元を歪めてみせた。

「伊達に『部長』って言う肩書きを背負ってはいないのかな?　日本刀を具現化させただけで、この眼がこれと同じ物だって分かるなんてね」

「それだけじゃない。お前が言った“具現”って言葉が一番のヒントになった」

ちよっと待てよ……具現……?　聞いた事がある……

その単語に引っかけた敬治は黙って、思案に走った。しかし、部長に肩を叩かれた事によって、その思案は妨げられる事となる。

「敬治君。二人で力を合わせて、何としても、キューブを取り返

すよ」

敬治の耳元で小声で囁いた瞬間に、敬治は思い出し、首を横に振った。

「いいえ。自分にやらしてください。すぐに終わらせますから」

俺と部長の会話を待っただけの余裕……具現……やっぱり、こいつはこの頃、噂を聞くようになった——具現の魔術師……

一步、雪乃に向けて足を踏み出す敬治に対して、警戒心を抱いたのか、雪乃はAraiアライを唱えてみせる。

「Sundob of a cserad lapec」
サンドウブ オフ ア クセレッド ラペック

その瞬間、彼女を中心として一つの大きな円とその中に小さな七つの円が展開され、結界が張られる。そんな雪乃を見ても、何もしようとはしない敬治を見て、彼女は笑った。

「これで、斉藤くんが戦闘の初心者だって分かった。普通ねえ？」

戦闘が始まるのと同時に結界を展開するもんなんだよ？」

「そうだよ敬治君！ 一人で戦っては駄目だ！」

「部長は怪我してるんですよ！ そんな状態で彼女と戦ったら、きつと死ぬ！」

そうだ……具現は危険な魔術なんだ……瞬きをした瞬間に相手が銃を握っていてもおかしくない魔術なんだ……！？

“具現”——それは想像したものを具現させる魔術。いや、それは魔法と言っても過言ではないものだった。

そして、敬治の暗示したとおり、雪乃の左手にはいつの間にか、日本刀が握られており、切っ先を敬治へと向けていた。

そんな彼女の姿を見て、敬治は眉間にしわを寄せた。

「魔眼この眼の能力はこれだけじゃないよ——Lamef」
ラメフ

雪乃がそのAraiアライを唱えた瞬間に左手に握られた刀の刀身は炎を纏った。そして、彼女は右手に持っていたキューブを右ポケットの中へと入れ、炎を纏った刀を両手で握った。

「部長……お願いですから、下がっていただきます」

敬治のその言葉に従って、後方へと退く部長。その瞬間、雪乃は一気に敬治との間合いを詰めにかかった。そして、炎を纏った刀を切っ先が届いていないのにも拘らず、敬治へと振るった。しかし、刀身に纏わりついていた炎が刀を離れ、敬治に向けて襲い掛かった。炎に包まれる敬治。

「敬治君!!」

そんな敬治の身を案じた部長が叫ぶが、敬治に反応は無い。

「呼びかけても無駄だよ、部長さん。斉藤くんを包んでる炎は外から魔術で攻撃を加えようと、消せない炎になってるの。だから、斉藤くんの魔術で炎を振り払うか、焼け死ぬか、の二択しか選択肢はないよ」

けど……叫び声を上げたりしないでことはまだ、焼け死んではないってことなのかな……?

言葉の続きを心中で呟いた雪乃は未だ、自らの炎の刀を構えたまま、動かない。

しかし次の瞬間――

「R i c e l e c t c h o s k」
リセレクト チョスク

――敬治が小さな声で A r a i を唱え、連続した「ビリビリ」と言う放電される音と共に雪乃の炎を吹き飛ばした。その姿は電気うなぎのようであった。そして、雪乃の姿だけに視線を向け、睨み続ける敬治は言葉を紡ぐ。

「お前は『普通は戦闘が始まるのと同時に結界を展開する』って言うってたけど……俺は最初から、“結界を展開させる必要なんてない”んだよ。俺の電撃の魔術は――――全ての魔術を破壊できる」

全ての魔術を破壊できる……!?!? だから、去年のあの時、あいつには魔術が通じなかったのか!?!? いや、それよりも敬治君の雰囲気明らかに変わった……?!

敬治の纏う空気の色が変わった事を察知した部長は、自らの足をじりじりと敬治から退けていく。その行動は、部長の気持ちの現れ

であった。

やっぱり……俺は電撃が怖いのか……？

自らの右脇腹を左手で抑える部長は首を横に振って、疑念を振り払おうとした。しかし、じりじりと敬治から遠ざかろうとするその足は止まらない。

「桐島、お前は選択をミスったんだ。俺たちに応戦せず、キューブを持ったまま逃げるべきだった」

そして、敬治はただ、自らの右手を雪乃へと翳^{かざ}した状態で、A^アr^{ライ}iを唱えた。

「――D^{デンサー}en^{ンサー}th^スur^ル」



「おいおい、お前ら！ 見とれてないで、ちゃんと練習に集中しろ！」

人工芝グラウンドでいつもどおり、練習をしていたサッカー部であったが、練習中なものにも拘らず、その何人かは体育館の近くで起こっている出来事に釘付けとなっていた。

そんな練習をサボっている後輩の頭にチョップを入れていきながら、サッカー部部长も満更でもないようで、少しだけ、敬治と雪乃の方を覗いてみる。

「先輩。なんか、魔術部ってサーカスみたいですね……火が出たり、電気が出たり……」

「はあ？ 何言ってるんの？ 魔術部って、理科の実験みたいなものばっかやってるだけなんじゃないの？ それにあいつら、無駄に頭良いし……」

と突拍子もない事を敬治と雪乃を見ていたサッカー部の先輩が口にした瞬間に、敬治の右手から電撃が雪乃目掛けて射出され、蛇行

していく姿を見て、注意をした自分もその光景に釘付けとなった。
「先輩……練習しなくて良いんですか？」



雪乃へと自らの右手を翳^{かざ}す敬治は、さっきと同様の^{アライ}Ar aiを唱えてみせた。

「^{リセレクト}Re select ^{チョスク}ch o s k」

その瞬間、敬治の右掌から一瞬の内に電撃が射出され、蛇行しながら雪乃の方へと向かった。しかし、その電撃は雪乃の構える刀に当たった瞬間に砕け散った。

「――！？」

大きく眼を見開いた敬治の表象を見て、雪乃は笑った。

「フフフ……不思議でしょう？ 斉藤さんの電撃の魔術が通じないなんてね？ 本当に不思議でならないよねえ？」

わざとらしく、敬治に何かを質問させるように誘導する口ぶりな雪乃の思惑に答えて、敬治は尋ねかける。

「その刀……一体、何でできてやがる……？」

「そう。この刀が斉藤さんの電撃を粉碎した原因。そして、斉藤くんが電撃の魔術を使うって聞いてたから、態々^{わざわざ}、わたしはこの刀を具現化させたの。この刀――“雷切”を、ねえ？」

“雷切”――それは雷、雷神を斬ったとされる日本刀の一つである。その話は言い伝えであり、本当かどうかは定かではない。しかし、雷、雷神を斬ったとされるだけあって、雷切のその刃は鋭かった。

雪乃が手に持っているのは具現化させた“雷切”であって、日本に現存する雷切ではない。その為、敬治の電撃の魔術を粉碎できたのかもしれない。

「これで、斉藤くんは無能。『選択をミスった』とか言ってたに
しては期待外れだね。部長さんも怪我してるし……もう、いいかな？」
雷切を右手に携たずさえたまま、後ろへと振り向こうとする雪乃。だが、
敬治はそんな彼女を呼び止めた。

「待て！」

「何？ まだ、遊んで欲しいの？ これ以上続けるつもりなら、命
令どおり——消すよ？」

鋭い眼差しと共に敬治へと向けられる殺気に、敬治はその口を綻
ばせた。

違う……こんなの殺気じゃない……本当に殺すつもりなんて無い
んだ……

彼女の本心があったように心中でそう呟いた敬治は、その綻び
をもっと、濃いものにしていく。

「やっぱり、君は優しいんだよ……」

明らかに柔らかな口調になった敬治のその様子を見て、雪乃はビ
クツとその身体を反応させた。

なんで……笑ってる……？

敬治の微笑みの意味が理解できない彼女は声を荒げる。

「……何言ってるの？ そんな訳無いでしょ！ わたしはこのキュ
ーブを使って——」

「——違う。君は優しい。『殺せ』って命令が出てるのに俺たちを
殺さないで、キューブを持って、早く逃げればいいのに逃げない。
それはさ——桐島が、優しいからだろ？」

雪乃の言葉を遮って、自らの意見を述べ終えた敬治に対して、雪
乃はあからさまに敬治から目を逸らした。

だから、この魔術を見て、キューブを大人しく渡してくれ……
心中でそう願いながら、敬治は雪乃へと翳アライしていた右手を下ろし、
突っ立ったままの状態になった。そして、敬治はそのAraiを唱
えた。

「――Denthur」
デンサー

その瞬間、敬治の体は大量の光と稲妻と轟音に包まれた。敬治のその姿は眩しすぎ、その周りにいた誰もが目を瞑るか、手を前に翳す事で直接その光を見ないように遮った。

そんな敬治の姿はまるで―――“地に降り立った雷”のようであった。そして、雪乃はそんな敬治の姿を見て、目を大きく見開いた。

激しい光……雷のような轟音……――

そう思った雪乃の頭の中には、ある“一つの単語”が浮かび上がった。それは去年から魔術師の間で、囁かれるようになった魔術師の名称。

「――地に降り立った雷のような魔術師……――まさか!? 斉藤くんが―――」

その“一つの単語”を告げようとした雪乃の言葉を遮って、敬治は“一つの単語”を告げた。

「――そう。俺が―――降雷レイメイの魔術師だ」

？. サボり部員（一人目）

「俺が————降雷こうらいの魔術師だ」

敬治けいじがそう言葉を放った瞬間に部長と雪乃ゆきのはその目を大きく見開いてみせた。

“降雷の魔術師”——その名称はちょうど一年前から魔術を使う者の中で飛び交うようになった。それは、その魔術師が他と比にならないほどの強さを誇っていたからである。その名称は自らの体に降り立った雷を纏い、敵を薙ぎ払った事から語られる事となったらしい。

そして、降雷の魔術師の他にも、紅炎こうえんの魔術師と言う名称もよく囁ささやかれている名称の一つである。

しかし、二人が驚いている理由は他にあった。

去年の『夏の魔術甲子園（仮）』にて、魔術委員会の会長を殺そうと謀った人物——部長と江藤と神津の三人の会話の中で“あいつ”と呼ばれ、雪乃に“あの人”と呼ばれた人物。二人は電撃の魔術を使うその人物の事を降雷の魔術師だと思い込んでいたのであった。だが、二人は敬治を見て思った。あの人・あいつとは明らかに電撃の質が違う、と。

電撃を周りに放電させ、「バチバチ」と言う音を発しながら、敬治は雪乃を睨みつける。

「キューブを返せ」

その言葉に雪乃が簡単に応じるはずなどが無かった。

「……Lamefラメフ」

そのAraiアライを唱えた瞬間に雪乃の刀は炎に包まれ、それを敬治に向けて構えた。

「引き下がれないの……どうしても……」

本当は向けたくはない刀を向けているような口ぶりです。そう告げる雪乃。それに対して、敬治も、自らの周りで「バチバチ」と音を立てている電撃を自らの右手に集め、一本の電撃の刃を作り出した。

そして、雪乃は一気に敬治との間合いを詰めにかかり、炎の刀を振るった。敬治はそれを自らの電撃の刃で受け止める。

炎と電撃がぶつかり合った事により、衝撃が二人の周りにいた全員に襲い掛かる。

雪乃は刀と電撃の刃がぶつかり合う様に眼を疑った。

なんで……！？ わたしの刀は雷切なのに、電撃が斬れないの！？ 心中で声を荒げる雪乃は刀と電撃の刃を凝視し、気付いた。

まさか……斬った瞬間に回復してるの！？

その瞬間、刀を包んでいた炎が消え去り、裸になった刀は電撃の刃に弾き返され、真つ二つに折れ去った。

後方へと尻餅を着く雪乃。その首に向けて、自らの電撃の形を操って創り上げた電撃の刃を突きつける。

「お願いだから……キューブを渡してくれないか……？」

雪乃に殺気を向ける事無く、敬治は少しだけ、微笑んだ。

この人なら……わたしを救ってくれるかも……

雪乃はその表情を見て、少しだけ、そんな希望を抱いたのかもしれない。

彼女の右手に握られていた具現の刀は砂のようにさらさらと空気に溶け込んでいき、彼女はその刀の無くなった右手でポケットの中のキューブを掴んだ。そして、ゆっくりとポケットの中からキューブを取り出し、敬治へと差し出す。

「ありがとう」

それを受け取った敬治は電撃の刃を消し、雪乃に自らの右手を差し出した。しかし、雪乃は訝しげな表情で敬治を見つめ、その手を取ろうとはしない。

その様子からこのままの状態では雪乃が手を取らないだろうと察

した敬治は言葉を発する。

「君はキューブを渡してくれた。だから、もう、俺たちの敵じゃない。ただの——部活仲間だ」

その言葉を聞いて、雪乃は自らの両目に涙を浮かべる。

『大量殺人犯の妹が近づくなよ!!』

過去に浴びせられた言葉が雪乃の頭に響き渡り、今の状況との差分だけ、彼女の眼に涙が浮かんでいく。

雪乃は涙を流しながら、微笑んで敬治の手を取った。



体育館

二階にある体育館の窓から、敬治と雪乃の戦闘を最初から最後まで眺めていた男がそこにはいた。その男は昨日、魔術部の行動を一日中、監視して、誰かに電話をかけていた男子生徒であった。

そして、男子生徒はまた、携帯電話を自らのポケットから取り出して、電話帳を開き、昨日と同じ人物へと電話をかけた。

『もしもし』

「電撃の魔術を使う部員は“本物”の降雷の魔術師でした。それに、彼女が魔術部に寝返ったように見えますがどうしますか？」

電話の相手は思案するような間を取って、告げる。

『彼女は裏切らない……いや、裏切れるはずがないんだよ。彼女と俺は“絆”で繋がっているからな』

「……あなたが命じたとおり、今回は手を出しませんでした。が、次はどうしますか？」

『そうだな……次はお前もキューブを彼女と一緒に奪いに行け。そして、彼女に降雷の魔術師を——殺させろ』

「分かりました」

そう答えて、携帯電話の画面を指で押した男子生徒は、携帯電話

をポケットの中に入れ、体育館を後にしようと後方を振り返った男子生徒。

今日はバスケット部、バレー部共に試合の為、体育館には男子生徒一人だけ、と思っていたのだが、振り返った先にはもう一人の人物が立っていた。

「誰だ？」

そう尋ねかける男子生徒だったが、もう一人の人物はその言葉を聞いて、嘲笑った。

「ああん？ それはこっちの台詞だろうがよお。A級犯罪者あ」

もう一人の人物は、髪をワックスで立て、学ランを第二ボタンまであげ、そこから覗かせているのは赤いTシャツ。身長は髪の毛を合わせたら、一九〇はありそうだが、実質、一八〇センチしかない。耳にはピアスをし、その姿はいかにもヤンキーだった。上靴の色は赤で、二年生だという事が分かる。

「A級？ 何の事だ？」

ヤンキーの男の単語を繰り返した男子生徒に対して、ヤンキーの男は声を荒げる。

魔術で犯罪を犯し逃亡した者——指名手配犯には、『S・A・B・C・D・E』の級が与えられる。Sが一番危険な級で右に行くほど下がっていく。

この級を判断するのは魔術委員会のうゐで、魔術法に則のっとって判断されている。

そして、ヤンキー男の目の前に存在する、さっきまで電話を掛けていた男は真正正銘、魔術委員会によってA級の指名手配犯に指定されていた。

「惚とぼけてんじゃねえぞ、クソ野郎！！俺が誰だか分かって言ってるのかあ？」

ヤンキーの男は自らのポケットから一冊の手帳を取り出し、犯罪

者の男へとその表紙を見せ付けた。手帳の色は黄色で、表紙には“生命の樹”の絵が彫られていた。

その手帳を見た瞬間に犯罪者の男はヤンキーの男を殺気を以って睨みつける。

「“委員会”の人間か？」

「そう。俺は魔術委員会の委員兼、東坂高校二年“魔術部所属”――――たなきしゅん柵木淳だ。よく覚えとけよ？ てめえを捕まえる奴の名だ」

「……もう、忘れた」

右手を自らの前に出す犯罪者の男に対して、柵木も自らの右手を前に突き出した。

「いいねえ……イラつく奴の方が甚振り甲斐があんだよ！ それに残念だったなあ。今日は晴れだが、計算するのがめんどいとは思えねえんだ！」



体育館横

「ちょっと待って！ 敬治君！ 彼女はキューブを奪おうとしたんだよ！ 魔術委員会に引き渡さなきゃいけないんだ！」

「部長ってもう少し、器の大きい人と思ってましたよ……」

「いや、それとはまた、話が別で！ てか、敬治君も清二君みたいな話し方にならないでくれよ！」

必死に声を荒げる部長に敬治は冷たい視線を浴びせた後、その視線を部長の腹に落とした。

「と言うか、早く保健室に！」

「それどころじゃないんだって！ 早くここから離れないと！ 敬治君まで――――！」

その先を言おうとしたその瞬間、大きな爆発音が三人の真上から響き渡り、砕けたガラスが三人の上から襲い掛かった。

「伏せて!!」

その声を上げた部長に従って、敬治と雪乃は同時に頭を腕で覆い、地面に伏せた。

一通り、ガラスが落ちてこなくなったと言う頃合を見計らって、顔を上げる敬治は、自らの頬がガラスによって切られている事に気が付く。

今の爆発……何だったんだ……？

ゆっくりと横の建物の二階にある体育館を見上げる敬治。そして、体育館の建物の影から、一人の人物が姿を現し、頭を掻きながら文句を垂れる。

「くそ……取り逃がしちゃった。こりゃあ、いろいろと書類を書かなきゃいけないなんじゃねえか、あのクソ野郎」

その男は先程、体育館で携帯電話を持った男と対峙していた人物——柵木淳であった。そんな柵木の姿を見て、部長は苦しい表情を浮かべる。

「淳君……」

「おい、部長。まさか、“そいつら”の肩持つ気じゃねえだろうな？」

先輩なのにも拘らず、口調を変えずに話す柵木は敬治と雪乃を睨みつける。

「ちよっと、待ってくれ! 『そいつら』って事は敬治君も入るってことだろ!？」

「そーだよ。その生意気な新入生二人。キューブを狙った奴らとして、魔術委員会に引き渡すんだよ」

えっ!？ 俺も……？

「ちよっと、待って! なんで俺も!？」

「先輩に向かってタメ口たあ、生意気極まりねえガキだな。共謀者の意見が聞き入れられると思うなよ？」

柵木は自らのポケットから先程、男子生徒に見せ付けていた手帳を取り出し、敬治にその表紙を向ける。そして、敬治が今まで聞いた

たことの無いAraiを柵木は唱えてみせた。

イラストラント

「E s t r a r i n t」

瞬間、敬治と雪乃は光の帯によって両手両脚を拘束され、バランスを崩した二人は地面に倒れこんだ。

「聞いたことねえ魔術って顔してるぜ、てめえ？ そうだ。これあ、俺たち委員会の人間しか持ってねえ手帳による拘束魔術。手足を拘束すると同時に魔術も使えなくなるから、てめえらはただのちよつとだけ頭の良いただの人間でことだ！」

人を見下す笑みを浮かべる柵木の胸倉に部長は掴みかかった。

「笑い事じゃない！ 雪乃ちゃんはどうがなとしても、敬治君はただ、彼女を許そうとただけだろ！？」

「犯罪者を許す？ おいおい、それだけでも精神異常者が共謀者じやあねえのか、部長？ この世に蔓延^{はびこ}る殺人鬼を肯定するなんてなあこの二つの異常者以外、ありえねえんじやねえか？ そして、俺の独断と偏見を以って、こいつを共謀者と判断した次第だ。抗議するんなら、委員会を通さねえと受け入れられねえぜ？」

独断と偏見……こんな奴が、委員会の人間……？

今の魔術委員会の仕組みに疑念を持ち始める敬治を柵木は見下ろしながら、言葉を続ける。

「てえことで部長は早く保健室か病院行ってる。刀傷は簡単には塞がらねえから失血死しちまうぜ？」

耳に嵌めたピアスを揺らしながら、柵木は地面に倒れた敬治と雪乃の方へと近づき、雪乃の前で立ち止まって、腰を屈めた。そして、雪乃の顔を右手で掴み、その左眼を凝視する。

「ほう？ これが魔眼か……“紋章の円が七つ”って事はてめえが言ってたとおり、具現で確定だな。じゃあ、俺はこいつらを魔術委員会に連れて行くから、部長は体育館の窓の件とかの後処理を頼むぜ？」

「ちよつと待つんだ、淳君。君が自分の権力を振るうって言うんなら、俺も権力を振るわせてもらおう。君が二人を連れて行くって言う

んだったら、君には――魔術部を退部してもらおう!!」

その言葉が響き渡った瞬間にその場の空気が一瞬だけ、時を止めた。

この人が魔術部に入ってるけどサボってる人の一人だったのか……そう言えば、さっきから「部長」って言ったっけ？

敬治は心中で「嫌だなあ」と付け足した後、柵木に視線を向ける。そして、面倒くさそうに頭を掻いた柵木は口を開く。

「てめえ、魔術部に入ってるけど、委員会の人間にはなれないって分かって言ってるそういうところがムカつくんだよ……」

体育館の窓ガラスが割れた音を聞きつけた人間が段々と、四人の周りに集まってくる中、柵木は何かを思いついたようで、言葉を続けた。

「そうだ。こうしようぜ、部長。俺とこの二人が魔術で決闘。俺が勝ったら、こいつらを連れてく。負けたら、罪を見逃す。どうだ？」

「……その決闘はいつするんだ……？」

「はあ？ 決まってるんだろ？ 次に雨が降った日に外で戦^やんだよ！逃げたら、どこまでも追いかけて、豚箱にぶち込んでやるからな！？」

にやりと口元を歪めてみせる柵木は敬治へと近づいて、その手からキューブを奪うと、どこかへ行ってしまった。

そんな彼が見えなくなった瞬間に敬治と雪乃を拘束していた光の帯は消え去り、二人は解放された。そんな二人に自らの頭を下げる部長。

「ごめん……こんな事になってしまって……」

「いえ、謝るのはわたしです、部長さん。わたしが命令に従わなかったら、こんな事にはなってません……」

「なら、雪乃ちゃんは『無理やり従ってた』って事？」

彼女は躊躇うような素振りを見せ、小さく頷いた。

まだ、信じる事はできそうに無い……けど、色々と、情報を持ってるはずだ。それを聞き出せば良い。それよも、この中に先生でも

いたら、ややこしく……

心中でそう企みながら、部長は周りにいる集まってきた野次馬を見回すと、その中には先生の姿も見受けられた。

「藤井。この説明は保健室でちゃんと、してくれるんだろうな？」

「……はい。一から全て……」

?. サボり部員（一人目）（後書き）

更新は不定期になると思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2993y/>

降雷の魔術師

2011年11月14日03時19分発行